

創業60周年 社 誌



TODACO

戸田興業株式会社

「戸田興業株式会社 社誌」冒頭にあたりまして

昭和22年。初代社長戸田育仙が終戦の混乱の中、戸田商会を個人創業してから本年にて60年目を迎えることができました。

創業以前は、「食べるために何でもやる」の気概のみで、鮮魚、青物や乾物の行商により生計を立てていた時期もあったとのことです。そして、「溶断器の修理」という生業にめぐり合い、これを少しづつ育て、発展させながら今日に至りました。

この間はまさしく山あり谷あり。ドルショック・オイルショック等の何回かの不況には苦闘し、また、高度成長経済の時流に恵まれ順風の時期もあり、「企業存続30年説」を2回分乗り越えることが出来ました。

これも歴代の全社員が一致協力し努力を重ねたことは基より、何よりも、お取引先皆様のご厚情、また関係行政当局のご指導、そして地域の皆様からの暖かい支えがあればこそと存じます。衷心より感謝の意を表するものであります。

この度、その歩みを忘備録程度ではありますませんがまとめることと致しました。二代目社長が他界した後は、その流れを知る人、お伺いできる方が次第に少なくなって来ております。まだまだ弊社は小企業の域を出ていませんし、立派な「社史」があるわけではありません。ですから「社誌」です。

内容は「私小説」の域を出ることはないかと存じます。一見すると視野の狭い、脈絡も取れていない、独りよがりのつまらないものと感じられるかもしれません。しかし、わが社の沿革、事業内容、経営の特色などにつき、一層のご理解を頂く一助ともなれば望外の幸に存じます。

また、次代を背負う関係各位の若手社員及び弊社従業員にも見て頂き、共通理解及び新たな前進に資する一粒の糧となることを念願致します。

経済のグローバル化が進む今日、大海の中の小さな木の葉でしかない弊社ではありますが、高圧ガス、産業機器、研究開発支援、環境関連資機材の供給メーカー、また流通事業者としてその責務を果たしていくとともに、この節目を土台に、より一層、社会的役割と責務を果たして参りたいと念願してやみません。

今後ともかわらぬご支援、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます、社誌の冒頭の挨拶とさせていただきます。



平成19年6月

代表取締役

戸田 毅

戸田興業株式会社 60年 年表

		会社イベント	会社情勢	経済情勢	社会情勢 エポック
1945年	S20	終戦	創業者 日本鋼管退職		ポツダム宣言受諾
1946年	S21		行商等により生計を立てる	戦後の混乱期	日本国憲法発布
1947年	S22	4月 創業 初代社長 戸田 育仙	溶断器の修理事業開始	「物」が貴重な時代	社会党片山内閣成立
1948年	S23			経済安定9原則	昭和電工疑獄
1949年	S24				ドッジライン発表
1950年	S25				朝鮮動乱勃発(～53)
1951年	S26			朝鮮特需	対日講和条約調印
1952年	S27	6月 法人化「合資会社 戸田商会」に	旋盤・ボール盤・万力・自転車スタート	戦後混乱の落ち着き	日本独立回復
1953年	S28		軽2輪車導入(翌年もう一台導入)		水俣病患者発病
1954年	S29		旋盤2台追加、及び動力装置導入		造船疑獄
1955年	S30			神武景気(～57)	日本ガットに加盟
1956年	S31		圧力計試験機導入		国際連合加盟
1957年	S32		川島、倉田両氏入社 液中基準器導入	ナベ底不況(～58)	南極観測隊 昭和基地設営
1958年	S33		小型3輪車導入		1万円札発行
1959年	S34		ダット4輪車導入	岩戸景気	キューバ革命
1960年	S35	10月 高圧ガス販売事業者登録	高圧ガス販売本格参入	高度経済成長突入	国民所得倍増計画
1961年	S36			消費レジャーブーム	ソ連ホストク打上成功
1962年	S37				東京都人口1千万人
1963年	S38		フライス盤導入		国際衛星中継ケネディ暗殺
1964年	S39				東京五輪
1965年	S40	9月 創業者妻 戸田こまん死去63歳			ベトナムで北爆開始
1966年	S41		自動ターレット盤導入	いざなぎ景気	人口1億人突破
1967年	S42		後継者問題に揺れる		ボンド切下 ドル危機
1968年	S43			GNP世界2位に	霞ヶ関ビル フラハの春
1969年	S44		自動盤1653型1022型導入		大学紛争 東名高速全通
1970年	S45				日本万国博開催
1971年	S46	11月「戸田興業株式会社」に組織変更	自動盤導入		沖縄返還
1972年	S47	5月 現工場落成			日中国交回復 札幌五輪
1973年	S48	8月 資本金500万円に増資 11月事務所棟落成	自動盤導入	円変動相場制へ	ベトナム和平
1974年	S49		売上3億突破 動力設備改善	オイルショック 戦後初マイン成長	日中貿易協定調印
1975年	S50			低成長時代へ	沖縄海洋博
1976年	S51		貸し倒れ多発	(旧)日本鋼管 扇島移転	田中角栄逮捕 毛沢東死去 国産衛星「菊2号」打上
1977年	S52				新東京国際空港開港
1978年	S53	2月 創業者 戸田育仙死去(享年78歳) 戸田剛二代目社長に就任		第二次オイルショック	東京サミット開催
1979年	S54			自動車生産台数世界一	イランイラク戦争(～88)
1980年	S55				校内暴力家庭内暴力急増
1981年	S56	9月 倉田一男 川島文雄 取締役就任			東北上越新幹線開通
1982年	S57				日本海中部地震
1983年	S58		大型貸し倒れ発生		アフリカで飢饉深刻化
1984年	S59		(初)NC旋盤導入		つくば科学万博開催
1985年	S60		売上5億突破		伊豆大島三原山噴火
1986年	S61			地価高騰	国鉄民営化
1987年	S62	11月 計量器修理事業登録		円高不況 狂乱地価	東京ドーム開業
1988年	S63				天安門事件
1989年	H元			消費税3%発足	ドイツ統一
1990年	H2				湾岸戦争 ソ連解体
1991年	H3		売上7億突破 (初)複合型NC旋盤導入	好景気続く	PKO協力法成立
1992年	H4	8月 資本金を500万円から1000万円に増資		バブル崩壊	米の大凶作
1993年	H5				村山内閣発足(55体制崩壊)
1994年	H6				阪神震災 地下鉄サリン事件
1995年	H7	6月 戸田 毅 入社	環境保全工事向け資機材販売本格化	低金利時代突入(0.5%)	第41回総選挙(小選挙区制)
1996年	H8				介護保険法成立
1997年	H9		分析ユーザー向け理化学機器販売開始	GNP戦後2度目のマイン成長	冬季長野オリンピック開催
1998年	H10	9月 戸田 毅 取締役就任		ゼネコンの倒産	東海村で臨海事故発生
1999年	H11		パソコン等情報機器販売定着		沖縄サミット開催
2000年	H12				小泉政権発足
2001年	H13	9月 3代目社長 戸田 毅 就任	新鋭NC旋盤導入 環境対応洗浄機導入	完全失業率5%	サッカーワールドカップ 日韓共催
2002年	H14		新ロゴマーク制定		BSE(米国産牛肉輸入禁止)
2003年	H15	9月 2代目社長 戸田 剛 死去(享年69歳)			新潟中越地震
2004年	H16	1月 永井雅章 取締役就任	サーバーコンピューター設置		愛知万博 市町村大合併
2005年	H17			BRICSの台頭顕在化	安部政権発足
2006年	H18				
2007年	H19	4月 創業60年目を迎える 6月創立55年	環境M.S導入 新鋭CNC旋盤導入		
2008年	H20				

1 始動期(昭和22年^{1947年}～昭和31年^{1956年})

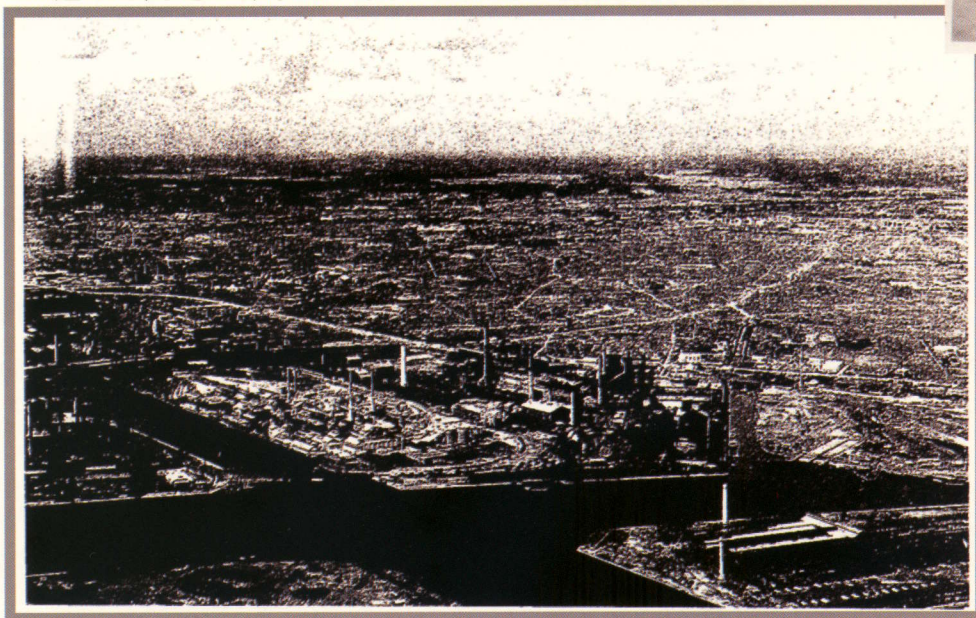
「廃墟からの模索」そして「創業」「創立」「朝鮮特需」

終戦直後。京浜地区はまさしく廃墟であった。
日本鋼管(株)の備品管理担当であった初代社長戸田育仙は、諸般の事情で退職し徒手空拳、生きて行くのがやっとの中で、現在地にて青果、鮮魚、乾物などの行商で食いつなぐ状況だったという。そんな中、前職の経験を生かし、溶断器の修理を手がけるようになる。

二代目社長となる息子、戸田剛は、(現)神代製作所株式会社さまの大井町にあった工場に修理技術を学びに日参。また、姉二人、妹を巻き込んだ、まさしく、家内工業としてスタートを切ることとなる。



上
周辺は畑、田んぼだらけ
当時としては立派な家だった



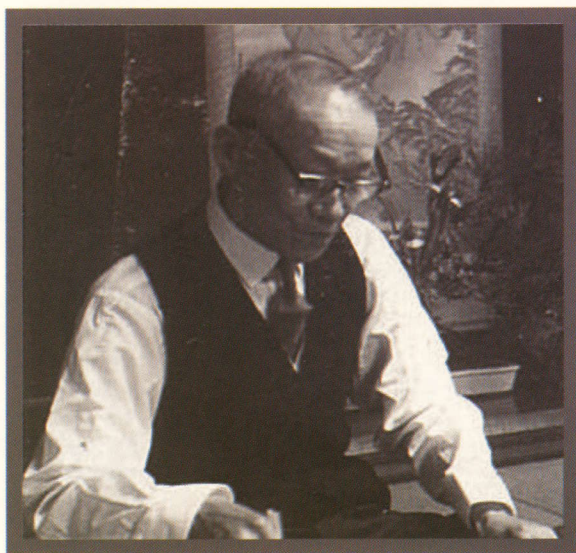
左
終戦間もない川崎臨海部
中央浅野セメントから弊社
所在地(渡田)方面
(まさしく焼け野原)

創業は昭和22年4月1日となっている。これは、古い会社経歴書に記載されているが、実際は明確ではない(高柴芳子氏談)。上述のような状況であったため創業日など確定できるはずもないが、少なくとも「溶断器の修理」を生業とし、方針を打ち立てたのはこの頃であろう。情勢は終戦の混乱が色濃く影を落とした時期でもある。

一方でその後数年は朝鮮特需の好況があり、仕事、職人も順調に増え、会社設立の基礎が出来上がる。昭和27年6月30日(実質は7月1日) 合資会社戸田商会設立。社員数は4名。

「事業目的 1. 酸素器具の販売並びに修理加工」

この次期は財政的にも苦しく(時効であるから正直に記すが)、地域の有力建設資材業者と協調的に融通手形等で運転資金を補いあっていたという。昭和30年になると、住み込みの職人さんも多くなり(昭和31年には8名)、にぎやかな食事風景が展開されたという。そして、いよいよ成長期へと向かう。



創業者 戸田 育仙

「創業者について」

創業者戸田育仙は宮城県の仙台近郊、現名取市に明治32年に誕生する。生家は曹洞宗の法雲寺。長男であり、寺を継ぐため鶴見の本山、総持寺に修行の為上京していた。ただその寺は、兄弟も多く経済的に困窮するに至る。そこで、得度後はすぐに(旧)日本鋼管に勤め始めたとのことである。もちろん、田舎に仕送りを続けるためである。

その後、昭和4年 こまん と結婚し1男3女をもうける。妻こまんは今で言う助産師、お産婆さんであった。巷では、「人間の生き死にをどちらも見届けられる夫婦」として評判だったとか。

仕事振りは、「愚直なほどまじめ、丁寧で几帳面」というように、明治男であり、仏道を具現化した生き様であった。

ただ、単なる堅物でもなく酒も歌もよく嗜んだ。これが2代目3代目にバイアスが掛かって受け継がれてしまったかもしれない。

僧籍にあったため、法雲寺歴代の当主のひとりとして、名取の寺にも分骨され、功労者として弔なわれている。

2 成長期(昭和32年1957年～昭和41年1966年)

「地歩の確保」「戸田こまん 死去」「多角化への始動」

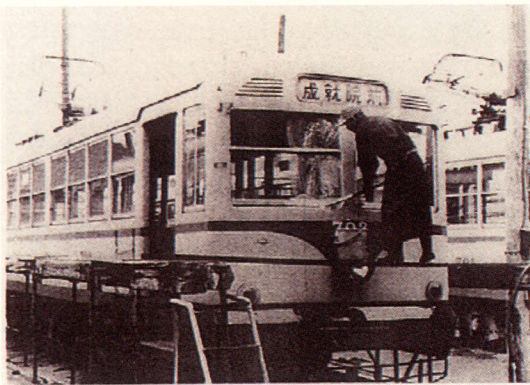


もはや戦後ではない。東京オリンピックを控え、高度経済成長へと向かうこの時期、「仕事はやりきれないほどあった」。

初代社長は、溶断器の修理を手がける他にこの熱源となる高圧ガスにも着目し販売許可を取得。順調であった修理に加え高圧ガス販売も本格化することとなる。当時は現在のアセチレン容器が無く、カーバイトの時代。ガスボンベも今と比較にならないほど重く、また、容器の数も少なく貴重品であった。高圧ガス消費機材と高圧ガスの知識が蓄積していくのはこの頃からで、高圧ガスの販売先が増えるとともに、「機工品もついでに持ってきてくれないか」との要望も増加。合資会社発足当初は、溶断機器の修理と新品の販売のみで、その比率も修理が大きかったが、昭和40年台には両者の売上比率が30%程度まで低下する。

また、昭和40年、41年は、車両や機械設備の投資も積極的に行われ、飛躍への土台が固まっていく。

「市電と戸田商会」



戸田商会への交通機関は、川崎駅から今は無き市電に乗り、成就院前下車(下の写真は昭和39年の成就院前停留所)。

歩いて3分といったところか。

当停留所の直近には渡田車庫があり、左のような洗車風景も見られた。深夜・早朝の発着もあり便利であったが、昭和36年をピークに利用者が減少、モータリゼーションも拡大し、戦中の昭和19年から続いた歴史に昭和44年3月31日を持ってピリオドが打たれた。



「数字で見る 約10年間の変遷」

昭和31年6月30日(4期)従業員数8名

総売上 6, 257, 751-

総資産 2, 353, 645-

↓ 売上・資産とも10倍以上の伸長

昭和41年6月30日(14期)従業員数24名

総売上 76, 066, 242-

総資産 44, 068, 396-

「高柴会計事務所 高柴喜義氏と戸田商会」

昭和33年の決算より、会計処理、経営指導を長年担当していただく。創業者からみれば娘婿ではあったが、会計士としての的確な処理、時に厳しい助言を頂く。

昭和41年の決算書「当期概況」には下記の通り記されている。「当期は売上の伸び悩みがあり、多少の売上減とはなったが、修理部門の伸長並びに値上がり以前の大量仕入による好調な商い、或いは高圧ガス類の一斉値上げ等を反映して、減収を補って尚、大幅な増益となった。しかし、利益は将来に備えてその殆どを留保したるは喜ばしい限りといえる」

今日、小さいながらも財務的には筋肉質で居られるのも、また不況の折に持ちこたえられたのも、「堅実経営」を指導してくださった、高柴先生のお陰である。

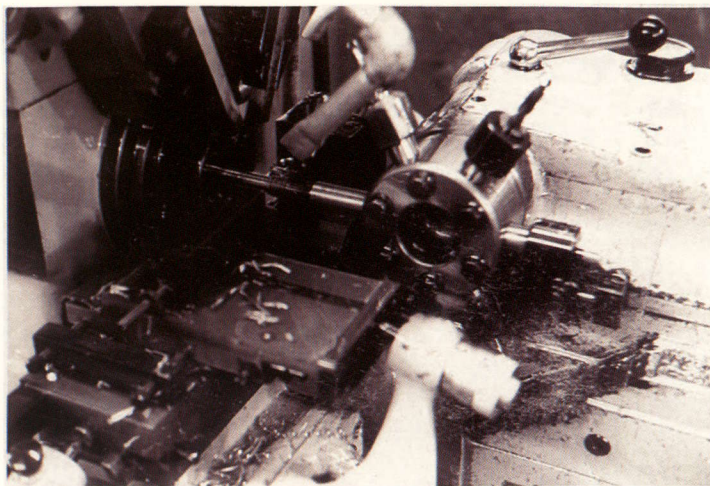


昭和33年初の自動車オート3輪導入

先生は平成10年死去。合掌

3 充実期(昭和42年^{1967年}～昭和51年^{1976年})

「高度経済成長」「新社屋落成」「戸田興業(株)発足」そして「低成長時代へ」



昭和40年台はまさしく「充実期」。売上も1億の壁をすぐに越え、3億円を越える期も出てきた。まず、工場部門では大量生産設備を導入し、火口等を自動化して効率生産できるようになった。当時、ガス溶断は日の出の勢いで普及し、各産業の裾野に拡大していく。高圧ガスの需要も急拡大し、この売上も伸長する。

役従業員数も30名近くにまで増加し、いよいよ手狭になった社屋(といっても、初代の母屋)の再開発が課題となる。

昭和47年11月。まず現工場棟が落成。一部事務所機能を移転し、母屋解体。今度はその地に鉄骨モルタル3階建てのビルを建設。竣工したのは翌11月。約2年掛かりであった。

落成後も設備の増強を続け、自動盤を多数導入。修理業者の中で、パーツセンター的な役割を果たすこととなる。

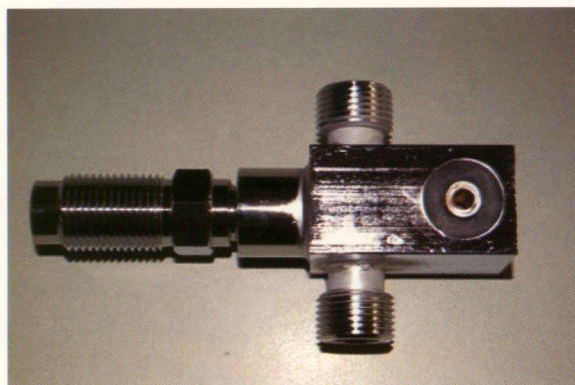
商事部門でも大きな変化が現れる。前の10年間では仕入れ商材の多くを、熔材一次卸店、ガス一次卸店、及び溶断器メーカーから調達していたが、この時期になると、機工卸売り商社の比重が高くなっていく。これは、創業者が工具などを管理する倉庫担当であり、手工具に愛着を持っていたからであろう。新社屋落成後、手工具の在庫を店頭にならべ、急なお客様の要望にも応えられる体制を整えた。また保護具やその他の買回り品も充実させ、この時期京浜間でも随一の品揃えであったと言える。昨今、ホームセンターなど多数陳列する店舗も見られ、弊社の店頭売りは比重を低下させているが、今もこれを踏襲している。

また、創業者はメーカー器具のパーツコピーに飽き足らず、数々のアイデア製品も開発している。そのひとつが「アセチレンガス簡易分配」。なぜかその形状から、田舎時代の玩具「アンポンタン」と命名。業界でも一部その名で通ったようである。

日時が合い前後するが、昭和46年11月1日に合資会社戸田商会から戸田興業株式会社に改組。命名はヤマト産業株式会社の創業社長であられた故奥井清一氏。「画数が抜群に良い、この社名に」と推奨していただいた。

また、創業者はその責務を息子の戸田剛に少しずつ委譲し、専務取締役として実質業務を任せ始める。各種の規定や決まりごとを少しずつ整へ、まさしく「戸田商店」から会社への脱却をめざした。そして、修理部品から配管部品への展開もこの時期から始まっていく。

だが、好事魔多し。昭和50年に近づくにつれ不況の波が押し寄せてくる。



アンポンタン



昭和44年 ホンパ置き場前風景

4 動乱期(昭和52年^{1957年}～昭和61年^{1967年})

「オイルショック」「低成長時代」「戸田育仙死去」「第二次オイルショック」「ステンレス加工の本格化」

昭和50年代初頭は混乱の中にあった。今でも弊社金庫に不渡り手形が保管されているが、昭和51年～54年に掛けてが特段に多い。オイルショックの後、基盤が脆弱な会社は次々と倒れていった。

弊社もその余波を受け、昭和51年52年を底に減収減益の期が続く。しかし、なんとかギリギリの線で赤字は回避していた。会社としても、低成長時代への対応を迫られることとなった。



そんな中、創業者戸田育仙が死去した(左は法衣の戸田育仙)。昭和53年2月の寒い日であった。

葬儀委員長には(現)東京山川産業株式会社中尾会長様にお願い申し上げた。東京山川さまには、増加しつつあった電機溶接機の営業に対し多大なご助力を頂いていたし、機工分野への進出に際しては古くからの大切な仕入先でもあった。

戸田剛はじめ残された社員は一致団結し、この悲しみを乗り越えていった。昭和56年には生え抜きの倉田一男を営業担当の取締役に、川島文雄を工場担当の取締役として登用する。名実ともに「戸田家の会社」からの脱却が図られていく。

さて、オイルショックがあったものの、(旧)日本鋼管(株)が扇島埋立完了。そして移転後、その波及効果は裾野を広げ産業の集積が加速する。弊社もその恩恵に浴することができたかもしれない。第二次オイルショック後の昭和55年には4億円代の売上をキープできるようになる。お得意先が増えたのである。日本国内を見渡せば経済状況は厳しかったが川崎南部は活気があった。電気溶接機は日の出の勢い。ガス溶断器だってまだまだ元気。修理もまわってくる。当然溶接棒などの消耗品も拡大基調だ。

溶材商としてはもっとも輝いていた時期かもしれない。

しかし、このフチバブルが終息に向かい、とんでもない落とし穴が待ち構えていた。昭和58年、何社かの倒産。大型の貸し倒れである。

業績は順調に推移していたものの足元をすくわれた。転んでしまったが立ち上がれるか。最悪このまま大怪我で倒れたまかもかもしれない。

そんな状況の中、まさしく帰死改生のアクションを起こす。あとでバクチを打ったとも称されたが。

「あの頃、ステンレスの加工を汎用旋盤で製造していたが、捌ききれない程で拡大基調だ。近くの引き物屋さんにも協力を頼んでいたがもう限界だ」

戸田剛は川島工場長とも相談の上、大型の設備投資を決断する。NC旋盤の導入である。それも59年と60年立て続けに二台、当時で数千万円の投資だ。ステンレスの高精度の加工、効率化にはNC装置が不可欠であった。

結果的にこのバクチいや投資案件は成功を収めることとなる。時代は半導体などの新産業に軸足を移しつつあり、高圧ガスの応用範囲は広がり、ステンレス継手の需要は拡大していく。

バクチではなく先見の明があり、必然的に勝利したといえるのかもしれない。

結局、この10年。戸田興業的には「浮き沈みの激しい激動の時代」であったと言える。



まだ現役 JNC-1の操作盤 昭和59年導入



二代目社長 戸田 剛

昭和8年に川崎区にて誕生。戦中一時仙台に疎開したが、爾来川崎区から離れていない。「川崎空襲の時銃撃を受けた」という。旧制中学最後の川崎中学入学者。「戦後食うために乾麺売りの行商をしたが偶然先生の家で恥ずかしかった」、「二代目というより、オヤジと一緒にゼロからスタートしたんだから創業者と同じ」とも述べていた。早稲田大学(第二政経)卒。神宮の早慶戦で第一ランペッターとしてプラスバントをリードしたという。

趣味の音楽は、一生の友となる。妻となる桂子とはコーラスで知り合い、ストレスの発散は酒を飲みカラオケで歌うことであった。

サミュエルソンの「絶対競争の原理」を座右に、「ニッチ」をねらう経営を推進した。一時期配管工事も手掛けたが、その中で配管部品の重要性を認識し、これをメインに押し上げる。

平成10年代よりガン治療の為に入院を繰り返すこととなるが 平成15年9月没。

5 バブル・ポストバブル期(昭和62年1987年～平成8年1997年)

「バブル到来」「新産業向けへのチャレンジ」「順風満帆」「バブル崩壊と経済のグローバル化」「停滞へ」

昭和60年台になると、「世界経済の中心は日本にあり」と思えるほどの繁栄ぶりであった(かもしれない)。「パクスジャパネ」。国内の地価は上昇する一方、マンハッタンの大きなビルや、世界の大型ホテルは日本資本の軍門に下っていた。経済のグローバル化が叫ばれたのもこの時期から。一方、我社はまだ地域中心の営業活動を行っていた。それでもOK、キャッシュはめぐりめぐって年商7億円を突破する。年号はすでに変わって平成3年のことである。

この時期、倉田取締役を中心とした営業部隊も絶好調。スクラップ&ビルトには必ずガス溶断がつき物。ガスやその消費機材が売れに売れた。ある溶断器メーカーの営業社員は、「考えることはなかった、ただ品物を確保して運んでいるだけで良かった、戸田さんには1日2回」。

世の中が、株だ、土地だ、先物だ、投資しないやつは馬鹿だ、という風潮のなか、弊社はすでに必要な投資は完了していたこともあって、大型投資はしていない。

「持ち株会で所有していた株を売却しようと思ったが高柴先生に止められた」。戸田剛の後日談である。

資産の効率的運用が利益確保の王道である。

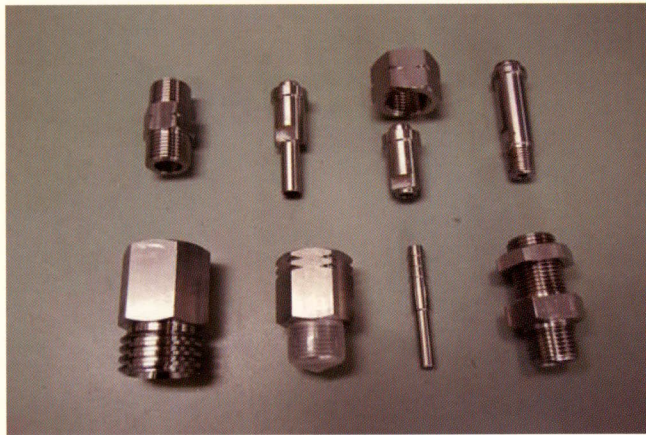
結果的にバブルに踊らなかったことがことが、やがて訪れる調整局面において困らずにすんだ要因だ。ただ、その後の勝ち組、負け組の土俵に駒を進めなかったのも事実だが。

人材の確保も困難な時期であった。完全週休二日制を実施。それでもなかなか人材を確保できない。巷では人手不足倒産なる言葉も踊るようになる。

世間は派手に動いている。しかし戸田興業は愚直に地道に歩いていく。実業。「人の役になってナンボ」である。



現社屋 平成19年現在既に築35年



高圧ガス配管継手製品群

戸田興業製ステンレス配管継手。ラインナップを充実させ少しづつ市場を切り開いて行く。食い込み継手用については今でもヒット商品である。また、半導体、食品、分析などの分野では加工精度、洗浄とも高度なものが要求され、すくなくならず弊社も応えていく。

一方で、「一定の品質のものをリーズナブルな価格で供給する」。至上命題であるが、この時期生産に携わった工場担当者達はそれに答え、市場からも評価を得たとと言える。

そんな、バブル期であったがすぐにポストバブル、失われた10年に入る。

まさしく、社内的にも調整局面。会社存続を掛けて昭和50年代以上の浮き沈みを経験することとなる。溶材商としての商材以外、「環境関連資機材」「理化学用品」「パソコン」の販売も始まる。

「近年(平成～)の表彰等」

平成 2年 6月	川崎南優伸会入会を許される	川崎南税務署所管
平成 4年10月	高圧ガス保安功労者(戸田 剛)	神奈川県知事
平成 5年 1月	防火管理優良事業所	川崎市危険物保全研究会
平成 5年 5月	感謝状 達成賞RUSH21セール	松下電器産業(株)
平成 5年 6月	ルビンジョンスフェロー(戸田 剛)	ライオンズクラブ国際協会
平成 7年10月	優伸会表敬訪問	川崎南優伸会
平成 6年10月	高圧ガス優良販売業者	神奈川県知事
平成 7年11月	感謝状 テイクオフ35セール	松下電器産業(株)
平成11年10月	金色有功章	日本赤十字社
平成12年10月	優伸会表敬訪問	川崎南優伸会
平成16年 3月	感謝状	川崎市社会福祉協議会



6 リセット期（平成9年1997年～平成19年2007年）

「脱溶材商ではなくお客様本位の多角化」「情報化社会本格到来」「戸田剛死去」「新たなる模索」

「リセット期」なる題目にすると、ややラジカルに思われるかも知れないが、要は還暦。人間にすれば子供返り、初心に立ち返ろう、そんな意味で、なにもかもチャラにしてというわけではない。できるはずもないが、もちろん過去に学ぶことも大切だし、その土台がなければ発展はない。

溶材商を取り巻く環境は変わった。ガス溶断はより自動化された他の工法に変わり需要は低下。アセチレンの出荷量が年々減少しているのがその表れだ。溶断器メーカー内でも一般ガス溶断機器はすでに亜流と化した。

それで、戸田興業は？。

まず、従業員。この10年間でだいぶ若返った。入社暦5年以下の人材が半数近くになっている。ベテランと若手の融合が図られた。

商材も変化し、生産も多品種少量に移行していく。

そして、新しい発想で、チャレンジしつづけなければならぬ。平成19年年初に、60周年にあたり下記の方針を定めた。



平成19年1月導入 最新鋭CNC旋盤

- ・創業時の開拓精神を喚起しチャレンジしていこう
- ・地球市民の一員として環境を保全し循環型社会を築こう
- ・感謝の気持ちを忘れずに奉仕の精神を持ち続けよう

環 境 方 針

我々、戸田興業株式会社は以下の方針の下、「環境経営」を推進します

地球市民の一員として環境を保全し循環型社会の構築に貢献します

1. 3Rを実践します

リデュース（発生抑制）

弊社の創業事業は「溶断機器の修理」修理事業を継続していきます
その際様々な修理事業を推進し、余分なゴミを削減していきます
長期使用に耐えうる製品を導入し、ロングライフ化につとめます

リユース（再使用）

「もったいない」を合言葉に使用済みを最大限再利用していきます
グリーン購入及びエコマーク商品の優先を心掛けます
流通業者として再使用の促進を積極的に行います

リサイクル（再資源化）

弊社廃棄物について再資源化を推進します
リサイクル関連事業者と積極的に連携していきます
サーマルリサイクル/エネルギー問題に積極的に取り組みます

2. 環境汚染の予防に努めます

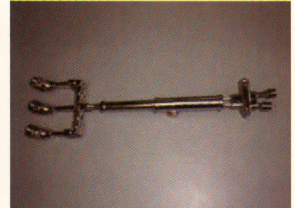
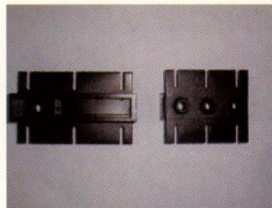
3. 環境に関する法規制・条例などを遵守します

4. 環境負荷の低減を実現するために 環境マネジメントシステムの継続的改善を図ります

平成19年1月1日 創業60年の年終を記念
戸田興業株式会社

環境マネジメントシステム導入

「製造部門の最近の成果」



「販売部門の最近の主要実績（新たなる模索）」

- ・クリーンルーム敷設
- ・廃家電ローラーコンベアシステム
- ・真空ストリップ装置
- ・特殊バナー開発
- ・土壌ガスサンプラー
- ・クーラントオイル循環システム改善
- ・廃家電クラッシャー
- ・分析向け標準ガス純ガス
- ・高圧ガス供給設備
- ・燃料電池開発関連機器
- ・各種理化学分析機器
- ・消防局向放水ホース
- ・プレッシャダイヤモンド型送気マスク
- ・シュレッダー レンタル事業

「二代目社長 戸田 剛の死去 三代目社長 戸田 毅 略歴」

平成15年9月17日に戸田剛死去。69歳。戸田毅はそれを遡る2年前より代表取締役となった。

昭和38年生まれ。学生時代は環境問題、都市問題に興味を持ち地理学を専攻。幼少よりボーイスカウトに所属しアウトドア活動に勤しみ、初代会長として学内サークルを立ち上げる（残念ながら10数年前廃部）。

OBとなってからも里山歩きから冬山、フリークライミング、またラフティングと呼ばれる川下りまでオールラウンドに実践。ラフティングは全国レベルの大会で6位入賞、その後海外にも遠征した。その時訪れたネパールの経験は強烈であった。

都市計画に携わりたいとの希望から、学卒後、航空写真測量会社、建設コンサル会社を経て、青年海外協力隊に参加。土木エンジニアとして、スリランカに赴任し2年間活動。井戸掘りや水道設備、ため池の構造物を担当。

31歳で帰国後、結婚、そしてすぐの平成7年6月戸田興業にハムレットの気持ちで入社。ただ、最初の仕事が株式会社テルムさまの環境改善の仕事。高圧ガス関連とは一線を画すが、これも何かの縁か。

今は、自分の未熟さを痛感しつつ、社業に打ち込む日々を送る。アウトドアはずっとお休みである。

ザ・溶材商社

<52>

戸田興業(川崎市川崎区小田栄一五一)の戸田剛社長は二代目だ。だから、このわけではないが、かつては工業ガス・溶材業界に身を置くことに抵抗があった。「これだけでは終わらないうち」という気持ちがあった。しかし、大学生活をおくる間に、仕方がないとあきらめた。

いま、二男一女をもつ父親だ。社会人となった長男が、かつての自分と同じ心境に。そのことに、なんとラッパを吹いていた。社交ダンスもいえない。

戸田興業 戸田剛社長

そのセンスが、経営にも生きている。脱溶材の方向は間違いないが、具体的な経営目標を掲げ、いまや「脱溶材商社」の方向に突き進む。その目標とは？ 同氏は恥ずかしからいえない、と笑ってこま。

戸田興業は二十二年四月一日、現在地に初代社長が創業。以前の初代社長は日本鋼管に勤務していた。その前は信託(そら)であったが、昭和初期に起きた東北飢饉(き)を逃れて川崎に出稼ぎに。そして鋼管に勤め、機械工具、部品な

て、海外旅行がまた一般的でなかった時代に、同氏がひとり富士山に登ったこと。青春の日々の心境がだる。

どをそろえた予備品倉庫の責任者だった。しかし、その父親にも不満が訪れた。戦争中、空襲の延焼を防ぐために、鋼管の資材置き場

脱溶材で時代を先取り ステン配管部品加工もフル稼働

が、その供給を受けられない社員の一部が、横流しをした。と根拠のない訴えを起した。上司への波及を恐れた父親は責任をとった。

二十二年、溶断機の修理業を興した。以後ユーザーニーズに応じて工業ガス・溶材も取り扱いはじめ、二十数年前には、同社のメイン部門となるガス向

が、その供給を受けられない社員の一部が、横流しをした。と根拠のない訴えを起した。上司への波及を恐れた父親は責任をとった。



「15年前に始めたステンレス配管部品加工が当たった」と語る戸田剛社長

に解体された建築資材が扱われた。戦後、鋼管社員が家を再建することになり、その資材を上司の指示で供給することになった。工をはじめたが、それがいま上

にマッチしたという。五十九、六十年と相次いで千数百万円のNC旋盤を導入したのも、その動きをキャッチしたからだ。

「しかし、一時落ち込みもあった。それが昨年夏から一転して需要が上昇、今年フル稼働だ。酸素、溶解アセチレンガスも、スクラップ・アンド・ビルドが盛んな都市型産業に照準を定め、営業マンを解体業者向けにアタックさせた。鉄工所向けはともかく、この分野は伸びている。同じガスでも、時代の流れに乗るかどうかが大事だ」

戸田氏は、昨年九月から稼働の景気上昇が続き、今年も継続していると強調。十一月は、一般的に落ち込む季節なのに、今回は逆に、例年に比べ七八%がアップした。さらにこの二月は、一五%がアップ。過去最高だ。

さらに同社のユニークな商法は、機械工具、部品販売が地方発注を含めた店頭売りで月商の一五%を占めることだ。仲間売りが多いという。同社には何で

戸田興業の本社ビル



昭和八年十月二十一日、川崎市生まれ、五十四歳。社員は二十三人。同氏の若さで経営センスが、今後どう開花するか。

資料 社内旅行ほか写真



株 戸田興業 S 50.4.5 伊豆熱川温泉 ホテル福島屋



小笠山 誕生寺
63年3月27日 15



2000/02 水戸から、長野県林へ
梨本国有林
天鏡管林署



戸田興業(株) 平成19年6月8日 函館夜景

TODACO

会社概要

商号 戸田興業株式会社
住所 〒210-0843 川崎市川崎区小田栄1丁目5番11号
TEL 044-344-7577 FAX 044-355-6212
E-mail: toda@todaco.co.jp URL: <http://www.todaco.co.jp>



営業概要

商事部門

各種高圧ガス 液化ガス
溶接システム 機器 資材
産業機器 機械工具
環境関連資機材
配管 電設 鋼材 等各種材料
理化学機器 分析機器
安全衛生保護具
パソコン等情報機器 文具

製造部門

溶断機器製造 開発 修理
高圧ガス配管継手製造
各種部材加工 治具製造
計量器修理事業登録(神奈川県)
高圧ガス供給設備
各種機器開発
研磨 洗浄加工
エンジニアリング業務